こんやの光

圓通の巻

慈悲の御親……一
起信論……三
最尊第一……一七
光明獲得……三〇
往生の二義……二九

慈悲の御親

佛を御親とし、衆生は子にして、これを布延して御話しいたします。

佛の御親と子の我等が間を例へば、こゝに家富み最も榮へる家庭に唯一人の男子が在つた。まだ頑是なき幼兒、花に戯むるゝか蝶でも追ふて、知らず〳〵門を出て、外に歩みて居り、其の人形の如くに麗しき兒は、そこを通る乞食の眼に映つた。可愛き兒ボーチヤン　あなた蝶が欲しくば私が捕へて上げませう、と頑是なき兒の憐れやつひに乞食の拐かさるゝ處と成つて乞食の群に入り

本は門閥の兒でありし豪富の兒も飢にせまれば乞食の子に歸し、心と雖も年久しくなるに隨つて、遂には本の生れ付の乞食と同然となる。

全體少年の功名心や虚榮心などは環境から養はれて起るものである。少年は俺は偉い人に成ると云ふものであるが、乞食の中に在りては功名心も知識欲も發するものでない憐れや此乞食は本々光榮ある身分に生れながら斯の如き淺間しき非人に化していとしや十歳計りの時にフツトした事から遂にかやうな思想が浮び出した。あの少年衆は頓て立派な人物と成るに相違ない、我も同じ人間に生れ乍ら彼の少年の如くに人物と成ることの出來ぬのは歸する所自分には教育をして呉れる父母がついて居らぬ。彼の子供等でも自己の力で偉い人に爲ることはできぬ。全く親の力を被らねばならぬ。然るに俺には彼等の如く教育をして下さる親がついて居らぬ。我とても人間に生れてをる。親の無いわけはない。其の親の力を被れば偉い人に成れぬことはないと、胸の中に浮んだのが動機と成つて、是より親をたづね親に逢はんとの心念が深くなつた。

是までは日々の思淺間敷も食ふ事を思ふ他餘念なかりしに、人間性の奥に潜める心が發いて、始めて眞の親をたづね親に逢つて親の教養を受けたいと云ふやうな眞の人間の心が浮び發つた。

されば只親をたづね、親に逢ひたいとの一念に成つてより、心を潜めて熟々考ふるに四五歳の時慈深き母の温顔が夢幻の如くに奥底より浮び出た。其面相をたどりて眞の母の慈顔に接したき心が深くなつて、逢ひたさが禁ずること能はぬまでに成つた。また一方母は自ら思ふに、いかに家富み財饒なるも之を讓るべき子なく、また自ら學あり藝あるも之を傳ふべき子なきことは實に寂寥に耐へず。本より子なきなればまだしも、本我子世にありながら之を子に讓ることできず、傳ふること能はざるは實に本意なきこととて、深き慈母の胸には子を憶念して捨ることなきも、これまでは母はいかに子を念ひ給ふとも子は母在すことさへ忘れたりければ如何とも爲ること能はざりしに、今は初めて子母を憶念して止まずなりぬ。親より子を憶ひ子より母を想ふ。兩方の憶念が相互に念じて餘念なく無我の狀と爲る時はたとひ千里の道隔てゝゐるとも相方の念が感應する時は宛然として相逢ひ相見ること現に相逢ひ見るが如し。

我らは靈性は具すれども未だ開けず只肉の我計りを愛して端なくも六道の乞食と爲れり。未だ曾て靈の御親在すことを識らざりしに、念佛三昧に、佛なる親を念じて、如來は眞の我らが父母にてあればこゝを離さず。如來はつねに我々を憶念し給ふ。我等一心に御親に逢はんと欲して慕つて休まざれば髣髴として現前に在

すことを覩ることを得、若は現在にも、また當來にも、大悲の温顔を拜し、慈悲の御顔を瞻むときは、また慈悲の御聖意をも知ることを得らる。佛を見たてまつれば、本々佛より受たる佛性は久遠劫來御離れ申していまだ御名をだに聞くことなかりし如來の眞實の慈父其御親が滿腔の慈悲を以て我等を愛しみたまふと聞いて我等いかでかミオヤを欽慕戀念せずして居られやう。一心に「我はたゞ佛にいつかあをひ草心のつまにかけぬ日ぞなき」と戀ふる時初めて心眼開けて慈悲の面かげに接することを得るなり。親を離れて子どもの成長することはできぬ、我等の心靈も如來を離れて育つことがたし。

世に一の御親の眞實在すことを識らずして人生を闇の中に暮してまた闇に入る人ほど不幸な者は有りませぬ。依つて同胞衆に誠に〳〵吾同胞衆に一に御親の聖意を御知らせ申して皆さんがミオヤを眞に御慕ひ申して親子の對面なすやうに(離れぬやうに)して上げたいと存じます。

愚衲が吾同胞衆に對してどうか我等迷ひ子を深く御意にかけ給ふミオヤの聖意を御知らせ申して御相見させたいと存じます故ミオヤは可愛き御自分のほんとの御子たちを何の闇の中に迷ふて居るものを放つて置かうと思召されませう。かくまでに子を憶ふ親に御會はせ申したいと云ふ事につきて、楞嚴經の勢至菩薩の圓通

の告白を紹介して勢至菩薩のミオヤを御慕ひ申なされて、つひに深き心の奥底より慕ひ申たる結果心眼開けて、ミオヤに對面して自然と無生忍を悟りなされた因縁であります。夫は先づかやうな因縁であります。

釋尊が一時舍衞國に於て楞嚴經を御説きなされた時に此の經は衆生の心源眞如の深義を明しなされたのですが其中に、

如來甚深の妙理を聞いて諸の迷の本源を明らめ、菩薩三摩地により無生忍をえ佛の開示をかうむりて心身皎然。爾時に世尊が普ねく其會に集れる諸の菩薩や大悟せる羅漢等に向つてかやうに告げなされた。今汝等は現に菩薩の無生の悟りまた羅漢の果を成ずるのは、例へば悟の花が開き果を結んだのである。されば此の花を開き果を結ぶに對しては過去に於て初め發心し聖の種子を播いた時が無ければならぬ。或は耳より聽いたとか、また眼より視たとか、意に念じたとか、其の悟の道に入る門は各あつたらう。其を此大會に其が本と爲つて今已に圓通と爲つて悟に入つたと各自の入門の因縁を告白したならば初心の輩の爲に眞門に入るの方便となると。

如來の命を被むりて第一番に座より起ちて佛前に出て恭敬禮拜して告白したのが、佛の最初の御弟子たる阿若憍陳如等五弟子であつた。廿五番の最後の告白をなされたのは觀世音菩薩であつ

八

九

た。廿四番目に勢至菩薩の告白が今我同胞に紹介いたし度いのであります。

勢至菩薩左なきだに自己の胸中に彌陀の慈悲にあたゝめられて燃ゆる如きの信念を以て、願くば世の同胞等を誘ふてミオヤの光明の中に引入れんとして居る勢至王子なれば、世尊の勅命を被むりて爭でか默して居られやう。從へる處の菩薩等と共に座を起つて佛の前に進みなされて其裝は實に嚴かに眞金の色鮮かに六八の相鮮かに百福の莊嚴を以て莊嚴せる人格の巍さ青蓮の瞳丹花の唇を動かして朗かなる音聲を以て、世尊の前に跪き、佛の足を頂禮して、恭敬合掌して、丹花の唇動かして、其音聲嘹々として、佛に白すらく、世尊我過去の往昔を憶ふに恒沙劫のむかし、佛世に出で給ふて無量光と名づけまた超日月光如來と號け奉る。我初めて其如來世尊に瞻仰し奉る時、彼の如來は我に念佛三昧の法を敎へ給ひき。譬へば人あり、兩人の間に於て一人は專らに甲の人を憶へども乙の人は甲の人を毫も相憶ふことなし。かくの如くならば、若しは逢ひ若しは逢はず。或は見たり或は見ることなし。兩人相互に愛念して逢はんと欲する念ひ深ければ生より生に至るに影と形の如くに離れずして相逢ふことを得るが如く、如來は全く一切衆生のミオヤに在ませば一切衆生の子を憐みて毫も相離れ給ふことなし。

一〇

一一

母の子を憶ふ如くであるも假令いかに情深き母我子を忘れず憶ふとも、若し子の身が母の許を逃走していかに憶ふもいかんとも爲すこと能はず、子が若し母を憶ふこと母の方より子を憶ふ如くに深ければ、母と子と生を歴ても相逢ひ相見ることを得る如くに若し衆生の心にミオヤの佛を憶ひ佛を念じて忘れずば、現前にも當來にも必定して佛を見上り、佛を去ること遠からず、方便を假らずして自ら心開くことを得ん。譬へば香に染める人の身に香氣あるが如し。此を則ち香光莊嚴と曰ふ。

起信論

筆記 (4)

宗

眞如三味とは眞如と自己の心とは一體となること、修行の上に慥にみとめ得らるゝを眞如三味といふ。理體の方面より觀ず。

念佛三味は感情、眞如の用より起したる報應二身に歸命信賴し之と相應して救濟を得。此兩方を離れ解脫の道なし。是れ起信論の主意とする處なり。

趣　歸趣

終局目的 { 向 ― 三位は向
　　果 }

宗により

眞如の理を知見し

三位 ― 信＝眞如理＝隨順して諸善法を修し
　　 ― 解＝眞如理＝隨順行＝五度＝
　　 ― 證＝眞如理＝隨順上供＝諸佛＝下度＝衆生＝

解とは法性に隨順して働き得る。形の上は我と彼と差別するけれども、法性に隨順すれば我も人も同じく一體と思ふ。故に同體大悲心が起るから、我も人も共に愛する。一分眞如と一致する。

正しく眞如を證得し、十地滿位色究竟處示一切最高身一念相應意を以て無明頓盡一切種智成無上覺を得るを終局目的とす。因圓果滿極度に至るを云ふ。前は一分眞如と一致するけれども、眞如中の我と思ふが今は宇宙精神と同體と思ふ。

成佛の後は不可思議の業用を以て、常恆衆生を度す。任運無作。譬へば日輪は自然世界中照す如く、佛は任運無作に衆生を濟度す。

用は其の法に依つて成佛する。

念佛三味は彌陀の業用を信じて淨土に往生し、如來眞如と一體なることを證得し、終局には如來の如く二利圓滿し、無窮に衆生を度するを目的とす。

客體の方より云はゞ智慧と慈悲

主體より云はゞ理(心理を開いて眞如と一致す。)

感性(御慈悲を受けて難有感ずる。)

何の方面より入るも終局は一に歸す之を宗趣とす。

常住不變にして變らざるものは宇宙精神是を實體とも實在とも云ふ。目前に見るものは皆かりに現象して始終生滅する。

自己精神は永恆不變の眞如の中に安立し、働く爲にはかりに身を

現じて修行し、迷ひの衆生を度す。
已上玄談を講じ終んぬ。

無量壽佛威神光明最尊第一

斯文は宗教に於て先第一に知らなくてはならぬ宗を標されたのである。宗に三義あり。獨尊。統攝。歸趣。獨尊とは宇宙間に絶對的偉大なる力を有てる唯一無比の尊き者の存在するを信認するそれが自己の活ける本尊となる。

他にくらぶ可き物もなく絶對的に尊く此の尊の外に全く歸命信賴すべきものもなく亦我を畢竟して救濟し玉ふ者は此の本尊の外に有るわけはない。佛教に十方三世の諸佛一切賢聖と云も悉く斯尊の分身にて此の尊を以て本地とす。一切諸佛神明の本佛なるが

故に威神力も光明も諸佛の及ばざる所である。故に獨尊と爲す。

統攝とは宇宙間の一切萬法を統て攝理し玉ふ權能在ます如來なり。是一切萬法の中樞にして一切の法則の行はるゝ中心は即ち如來なり。一切萬法は此の如來の一大法則に攝理せらる。一切諸佛聖賢も悉く皆彌陀を中心とし彌陀に依て統治せらるゝものとす。是如來は一切諸佛萬法の中心なることを明す。歸趣とは一切萬行の歸する處諸佛の教ゆる法に則りて行爲するを佛行とす。眞善美の靈界に歸趣する行なり。一切諸法萬行八萬の波羅密菩薩の向上進化の終局は即ち阿彌陀佛國に歸着するにあり。阿彌陀佛國は無上涅槃界にして一切諸佛も終局は涅槃界に歸して安住し玉ふ。

阿彌陀は一切の萬法の根本諸佛の本地にてまた一切萬法の中心にて一切萬行の終局の歸趣する處なり。過去一切諸佛彌陀三昧に依て成佛す。

亦楞伽經には十方三世一切法報應佛菩薩は悉く阿彌陀佛國より生ずと。

宗教には宇宙に唯一の獨尊を認信して之に由て救を求る本尊とすべきも凡夫の窺知る處にあらず。此に於て大聖釋尊我らに示すに無量壽佛威神光明最尊第一にして諸佛の光明能く及ばざる所と敎へ玉ふ。

如來は我等一切衆生の唯一の大御親に在ませり。斯御親の外に

我ちを救玉ふ者有ることなし。宇宙唯一の大御親を眞實に信認して毫も疑はず斯如來に絶對的に歸命し信賴してついに變せざるに至るを安心已に決定すと云ふべきである。

若し阿彌陀如來も一切諸佛と同一にして諸佛の隨一と認做す如きは未だ宗敎の眞理を得たるものでない。全く之諸佛の本佛にして獨尊絶對無比の獨尊にて一切諸佛を統攝して一切萬行の終りなりと信ずるを宗の眞義を得たるものとす。

光明獲得

きよきミオヤの大道を宣布し流傳せんには先づ自已の實踐躬行せる倫道を諦に躰得すべし。古人曰く自行妙宗に暗ければ他を益するに山なしと。道とは例へば若は帝都に通達する國道あり縣廳を中心とする縣道また郡道あり。何れにしても其中心に向て趣くの行程なり。帝都に趣くの道に就ざれば其目的の地に達することは能ぬ如し。況んや宗敎殊に最も高等なる佛敎に於ける大みおやの大道に於てをや。佛敎に精神と行爲とに道を五乘に分つ。人道天道　聲聞道、緣覺道、佛道是なり。人道とは人類としては自已に五常即ち人格要素なる仁義禮智信の德を具備し、都て倫道は父子君臣夫婦兄弟朋友の倫理に之らを全うして人道を履行して人たるなり。若し倫道を履ざるものは人格具備するものでも人倫を全

うしたものではない。

次に元道とは最高等なる理想と尊き十善を以て公明正大天道的の行爲天の道を行ふ人である。情操にも行爲にも天道的である。

聲聞道とは生死の苦を知り煩惱の本を殺し三十七道品等の智眼を開きて道品を履行うて涅槃なる常樂の都に達す。聲聞の道の終る目的の涅槃の都とは死後の彼岸にあらず。此三十七道品を階段的に進む時はついに初めに法眼を開きつぎには三明六通のさとりに登りて精神的に涅槃の都の開け來る羅漢のさとり開きて觀ずるに此處が即ち極樂涅槃界である。光明世界である。此の羅漢の涅槃に致らんには必ず四聖諦の內三十七道品の道を諦かに知りて而してその道を行はねばならぬ。

次に緣覺道とは先づ斯くある六道の生死の凡夫が三世に流轉して生死の苦を脫することの能はぬのは、其本凡夫の無明といふ心の闇である煩惱のくらき心からなす業は苦の本である煩惱から活動する業は苦の果を感ず。果より因を生じ因より果を發し生死流轉極りない。若し無明の本をしらへて精神に超然たる靈的光明が顯はれ來れば心が明るき故に生死を受くるような業を爲ぬ故に光明の中にて行ふてゆく階級的の道は即ち結果が緣覺の涅槃の都である。

次に菩薩道。之を通達すれば結局に佛果正覺の大涅槃である。

菩提薩埵として菩提は佛にて薩埵は衆生である。如來の光明を受得した人と云ふ義である。此菩提道にも種々な方面から成佛に進む道はあれども、今は大みおやの大道に生活する人を菩薩と爲す菩薩とは如來と共に在る人なり。また如來の靈應が我に有る人なり。如來の光明の中にて淸きに向つて行ふ人である。

如來の靈光に養はれつゝある人、如來の聖旨を行ふ人である。

如來の光明の道は至善の世界大涅槃即ち極樂に達するなり。

光明の大道は即ち涅槃道である。如來と共に運ぶ路は大涅槃に達するなり。

人生の行程を只肉の生活の爲に闇黑に行ふ人は六道流轉の道である。

今傳道とは自から如來の光明の大道にふれてまたすべての人々を光明の大道に誘導し歩々に光明に向上し行きて悉く如來の使命を果す。

一切の所作悉く如來の命令なり。皆是佛行なり。如來我に在りて働きたまふなり。此の道を宣傳するなり。自己と共に光明の大道に行く事を勸むるなり。精神一たび光明の大道に出づる時は從來の六道流轉の凡夫とは意向に於て同じからず。人生の目的に於て異なれり。

人格の核たる靈に於て異れり。昨日の凡夫今日の聖子とかはり

六道の岐路に彷徨ひたる心が今は光明の大道を得たり、自ら大道に出で他を誘ふて光明の道に就かしむ。此を傳道といふ。

傳道の宗は三昧を傳道の宗とす。光明の大道に出でんに光明の發する中心なくてはならぬ。光明を諦に認めずんば自己の光明となす能はず。

如來は光明普く十方世界を照す。然も此の光明を自己の物となすに至らざれば我れに於て何かせん。

此の光明獲得を宗とす。光明を獲得せんとせば神人合一即ち如來心と吾と合一す可き念佛三昧是即ち宗とす。

念佛三昧とは即ち口常に聖名を稱へ意常に如來を念じ、身彌陀を離れず、心々常に彌陀を捨離せず念々如來と合す久々にして純熟すれば絶對なる大靈中の自己なれば自己の心靈に如來の靈光感發す。

感發すれば即ち光耀と現じ、または花を見、好相を感ず。如來の慈悲が表現して相好の靈應身と現ず。

靈應の發現即ち自己の心靈顯はれにて聖靈感が即ち活きた信仰となるなり。靈的生命となるなり。此靈應常に我に在ます是念佛三昧發得すればなり。

是靈應即ち自己の本尊なり。常に我を指導し我が活動の原動力となるなり。道德制裁の指導をなすなり。

靈應は即ち如來なり。また分身なり。

教祖釋尊入滅の砌遺命して曰く如來法身常住滅せざるなりと。釋尊の心靈に住ます法身は展轉して弟子に傳はり普く傳播して廣く世に行はる燈を傳へて滅せず。法身即ち靈應なり靈應より發する光明常に我行爲を照す靈應が光明に指導せられて常に行住座臥に如來と共に在るなり如來と共に行ふ個々の三業は常に光明の大道にありて向上して如來の光明界なる涅槃に進むなり。

光明の大道を流傳せんには先づ靈應我に在る念佛三昧發得を宗とす。三昧發得即ち光明の發得なり。自己未だ光明を發得せずして他を光明の大道に誘ふべき理あらんや。光明大道の終局目的光明發得は人生を靈界に導く。光明の大道は自ら無作に大光明界に通達するなり。

靈界は至眞至美至善の靈界である。光明は智力に對して至眞を悟らしめ意志を至善に進ましめ感情を至美に化す。如來の靈應我に在りて我如來に靈化せらるゝ時は見聞覺知眞理を悟らば靈化せられたる意志は善となり、靈化せられし情は樂しく快く現に光明大道に在りて日々夜々行ふ處常に淨土に向て向上す。之を往生とす。

往生の二義

往生淨土を傳道の目的とす。往生に形式と活動、理と事とあり。形式とは已に光明發得の上には從來の我にあらずしてみだの子たる我なり。即ち肉の我は靈我となり薩埵は菩提薩埵と爲る。光明を得た人と爲る。娑婆に居ながら淨土を觀ず。相待因果の心にあらずして絶對靈界の人となる。

盡十方無碍光明中の人となり之を精神の形式に於て淨土の人となりしなり。次に娑婆にてみだの淸淨光に靈化され玲瓏と輝き感情には法喜禪悅の妙味を常に感せられ意志は靈化して意業の所作悉く聖旨より我に現はるゝなり。

然れども事の往生とは往は至善に向ての行程にて歩々に向上し行きて薩埵の大道に進み階級的に進むを往とす。此には靈と肉、煩惱と菩提との建闘。若し光明を離るれば忽ちに肉の煩惱に横領せらる。光明の靈力を以て逆襲す。

自力と他力の別は自力は罪惡にて他力は正善である。他力の光明を以て自己の闇黑を破り歩々に新なる不斷の革新不斷の向上を一生に渡りて斷やさず。

此道德の制裁は悉く如來の靈的光明によりて得らる。若し光明を得ることなければ終身肉の奴隷となりて三惡の闇に墮落すること免れ難し。

光明靈化の力を以て一生を通じて至善の行程となし臨終の夕を

期す。之を往生の實行とす。

光明の大道を往進し勇趣するの謂なり。傳道家は衆を率ひて光明の大道に共に進むを目的とす。即ち自己の心靈に燈りつゝある光明を以て三業の行爲を以て他人の意志を照し靈化の德を以て大道に進ましむ。是を傳道の目的とす。

舊式の往生は世を厭ひて死に往きて死後に樂土に生るゝを意味す。今往生は精神的に自己心底の靈性を如來の靈光に開發せられ靈の伏能が顯動態となるを生と云ふ。復活の義である。復活の靈は光明の大道を勇進邁往して日々に新に生れ時々に活ける靈活を往生と爲す。

昭和八年六月二十五日　印刷
昭和八年六月二十八日　發行
（誌代年壹　圓）
編輯兼發行人　山崎辨成
小石川區關口町六十五番地
印刷人　小林七太郎
小石川區關口町六十五番地
印刷所　靜文社印刷所
電話牛込五四一九番
東京市小石川區水道端二丁目四十四番地
ミオヤのひかり社
振替口座東京六六八五一番